「桃山学院教育大学研究紀要　第２号」　刊行に寄せて

学長　梶田叡一

本学が桃山学院教育大学として衣替えし、再スタートしてから２年目を迎えました。教育活動も研究活動も社会貢献活動も全てが刷新され、新たな形での取組みが順調に進められていることは、まさに「デオ・グラシアス（神に感謝）！」です。

この研究紀要も本学の新たな研究活動の重要な一端を担うものですが、ここに第２号を刊行することができました。各論文とも、なかなかの力作となっています。お読みいただいてお気づきの点など御指摘頂き、互いの研究交流を深めると共に、各執筆者の研究の次の展開に資することができることを心から願っております。

あらためて申すまでもなく、大学は伝統的に、研究ということをその固有の使命の大切な一部と位置づけてきました。しかしながら、現代のように高等教育の急速な大衆化が進み、誰もが進学できる「大学全入時代」を迎えますと、残念なことながら研究に対する大学人の意識が希薄になりがちです。特に日本の大学人に対して、昨今、「新たな知の地平を切り開く」という気概も意欲も失われてきたのでは、という危惧の声が聞こえてこないわけではありません。我々としても一層奮起しなくては、と思わせられるところです。

桃山学院教育大学研究紀要第２号の刊行を機会に、「人間教育」を全力で推進する決意を持った我々桃山学院教育大学の教員は、研究の面でも学生達を含む後進の方々の模範となるような進展深化を図っていくことを内外に誓いたいと思います。本学教員のこうした＜志＞をご理解頂き、一層のご協力ご支援を頂ければ、と心から願っています。